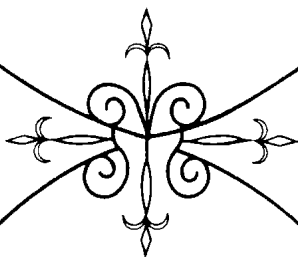


三島由紀夫全集



16

小 説

XVI

監修／石川淳 川端康成 中村光夫 武田泰淳
編纂／佐伯彰一 ドナルド・キーン 村松剛 田中美代子

新 潮 社

三島由紀夫全集第十六卷

昭和四十九年八月二十日印刷

昭和四十九年八月二十五日発行

著者 三島由紀夫

発行者 佐藤亮一

装幀者 杉山寧

三島由紀夫



発行所株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町七一 振替東京八〇八

電話業務部(〇三)二六六一五一一 編集部二六六一五四一一

定価二五〇〇円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします

第十六回配本(全35巻・補巻1)

Copyright © 1974 YŌKO HIRAOKA Tokyo Japan

三島由紀夫全集 第十五卷 目次

三島由紀夫レター教室	七
夜會服	一八一
命賣ります	四〇九
解題	六四三
校訂	六四四

三島由紀夫全集 第十六卷 小説 (16)

三島由紀夫レター教室

登場人物紹介

このレター教室は、すこし風變はりな形式をとります。

五人の登場人物がかはるがはる書く手紙をお目につけ、それがそのまま、文例ともなり、お手本ともなる、といふぐあひにしたいと思います。

五人はそれぞれの生活において、泣いたり笑つたり、戀したりフラれたり、金を借りたり斷わられたり、また一方では、ネコをかぶつてお上品な社交的な手紙を書いたり、また、お互ひ同士で、憎み合つたり、あざけり合つたり、人からきた戀文を見せ合つたり、千變萬化の働きをします。おしまひには絲がもつれてこんがらかつて、大變なことになるかもしれませんが、手紙は手紙、それぞれの一通は、一つの完結した世界です。

さて、そろそろ、この五人を順々にご紹介しませう。

(A) 氷^{こほり}ママ子 (四十五歳)

これがつとも始末に負へない人物です。四十五歳の、かなり肥つた、堂々たる未亡人で、元美人。

自宅で英語塾をやつてをり、それが當たつて、今では祕書もをり、助手もをり、大學生の息子と、高校生の息子がゐるが、兄のはうはとんだブレイボーイで、弟はひどい堅物。

ママ子は、良人とともにアメリカぐらしを三年やつて、そこで英語をおぼえたが、良人が死んだあとで、大した役に立つたわけ。派手なプリントもやうのワンピースを着て、猫みたいな聲を出す。

口も八丁、手も八丁、英語のしゃべりすぎで、口を三角にあけたり、四角にあけたり、とにかく口をあけすぎる。

上流氣どりで、いろんな社交的な會合に顔を出したが、一方、戀愛のはうも忙しい。生徒の一人と仲よくなるときは、わざと英語のラブ・レターを書き、その読み方を採點するが、ふつうの場合はもちろん日本語。

筆まめで、一人であるときはやたらに手紙を書き散らす。ダックスフンドを一匹飼つてゐる。

(B) 山トビ夫 (四十五歳)

ママ子と同年のボーイ・フレンド。

有名な服飾デザイナーで、チョビ髭を生やしてをり、旗竿のやうにやせてゐる。

何でもかでも自分が一番洗練されてゐると信じてをり、皮肉屋で、文學的だが、どこか田舎く

さいところがある。それといふのも、鹿兒島生まれで、十五のとき家出をして、東京の伯父さん
をたよつて、デザイナーへの道を一人で邁進した経歴があるからで、今はすっかりそんな昔を忘
れたやうな顔をしてゐる。

ママ子の洋服を作つてゐるうちに、まつたくの親友になり、何でも打ち明け合ふやうになつた
が、お互ひに好みがちがふので、戀人同士ではない。

奥さんはお針子上がりの大人おとなしい人で、主人の生活にいつさい干渉しない。

トビ夫は、猫を五匹飼つてをり、ネクタイを五百本持つてゐる。戀愛生活は豊富で、ときどき
柄がらにもなく純情になり、うれしいときは、横つ飛びに飛んで歩く癖が、タラバガニのやうだ。

(C) 空からミツ子 (二十歳)

水ママ子の英語塾のかつての生徒。英語はモノにならなかつたが、ママ子に氣にいられ、塾を
やめたあと、ときどき往き來がある。

大きな商事會社につとめてゐるOLだが、お嫁に行くまでの腰かけのつもりでゐるから、仕事
に身が入らない。

ソコツ者で、言はれたことをよくまちがへるけれど、叱られても明るい顔であやまるので、人
に憎まれることがない。

小柄で、大きな目をしてゐて、鼻の形がかはいらしく、どこをつついててもピチピチといふ音が
きこえるやうな氣がするが、ふしぎな特長は字がうまいことで、従つて、自然に筆まめになつた。

手紙だけよむと、どんなに内向的な、やさしいお嬢さんかと思はれるところがミソだが、ときどき、おのづから、茶目つ氣が顔を出す。

自動車の運転を習ひしたが、なかなか免許がとれない。

(D) 焔^{ほのほ}タケル (二十三歳)

貧しいながら、芝居の演出の勉強をしてゐる、大まじめな、理屈っぽい青年。

ある劇團に、見習ひみたいに勉強に入り、その芝居の衣装デザインのことと、ときどきトピ夫の店へお使ひにやらされ、たまたま來てゐたママ子と言葉をかはし、大演劇論をブつてから、ママ子にもトピ夫にも氣にいられ、ミツ子にも紹介されたが、タケルは、かういふブルジョア的な空氣には反感を感じてゐる。

ほんとはボサボサ頭の新劇青年風のおしゃれをしたのだが、アルバイト先の会社の仕事がエレベーター係なので、服装がやかましく、さうもできない。

年中ヒマなして、働いてゐるか、議論してゐるか、食べてゐるか、ほかに何の餘裕もないみたのだが、手紙だけはセッセと書く。

文才があるので同じ借金の申し込みでも、行儀作法をやかましく言ふ先輩には、その先輩に氣にいられさうな文章が書けるのである。

タケルの顔つきは、理論ほど深刻でない。

(四) 丸トラー (二十五歳)

まんまるに肥つてゐるので、世にも樂天的である。人が樂天的に見てくれる以上、さうならざるをえない。

ミツ子の從兄いとこで、大學をもう三年留年してゐる。

頭はさう悪くないのだが、ただ怠けて、テレビを見て、食べてゐるのが好きで、ほかのことはあまりやりたくないのである。

體を使はないことなら、わりに無精ではない。はうばうにペン・フレンドを持つてゐて、切手収集家で、切手の交換などをやつてゐるが、われながら中學生的趣味だと思つてゐる。

無器用で、道を歩けばよその子供にぶつかつてころばせるし、タバコを買へばおつりをもらふのを忘れ、いつもぼんやり自分の出した手紙の返事のくるのを待つてゐる。

空想家で、空想の中では、自分を世にもスマートな青年と想像してゐる。

**

これで五人の紹介ををはりましたが、こんないろいろさまざまな境遇と年齢の差をこえて、これらが、「筆まめである」といふ點では共通してゐる、といふことがおわかりになつたでせう。

萬事電話の世の中で、アメリカではすでにテレビ電話さへ、一部都市で實用化してゐますが、手紙の効用はやはりあるもので、このキチンと封をされた紙の密室の中では、人々は、ゆつくりあぐらをかいて語ることもできれば、寝そべつて語ることもでき、相手かまはず、五時間の獨白

をきかせることもできるのです。

そこでは、まるで大きなホテルの各室のやうに、もつともお行儀のいい格式張つた會話から、
聞きのむつ言ことばにいたるまで、餘人にきかれずにかはすことができます。

……今、(A)なる人物、氷ママ子が手紙を書きだしました。

彼女の便箋は實に散文的な事務所用箋だが、何度も頬杖をつきながら、考へ考へ書いてゐるところをみると、何か大切な内心の告白をやつてゐるやうにも見えます。……